

「正解・不正解・無正解」

松濤学舎

宮崎 優汰



東京に出るまで、私は一生佐賀から出ると思っておらず、家族以外のだれかと衣食住を共にするとは思っていなかったのだが、松濤学舎に来てから、たくさんの初めてを体験することになった。正直に言って私は入寮するまでは一人暮らしだけを望む人間であったが、そんな私の価値観は入寮してからすぐに壊されることとなった。今までに出会ったことのない人々との触れ合い、イベントや先輩方・同期との交流を通じて、東京という大都会を感じることも、どれもが初めてすぎて、刺激的な日々であった。これまでとは違

うワクワクを与えてくれた存在が松濤学舎であり、どんな日々でもこの寮にいれば間違いないと思わせてくれる存在であった。進級するにつれ、自身の立場や役割が変化していく中で、自身が置かれている状況について考えることが増えた。寮内外のことで悩み、悩まされる中では、自分や他人のことを否定しなくなる瞬間も多々あった。最近自身を肯定できるのは自分しかいないわけであり、自身を否定してしまうのも自分なのだと思っている。だが、他者の見方や言動はやはり気になってしまいが、視点を変えようと結構気楽に感じられるもので、他人の意見や評価を喜びとして受け入れることが、自身の成長の糧となる。また、自分を落ち込ませるものと感じるのではなく、自

筆者のプロフィール

出身地 佐賀市

出身校 佐賀商業高校

大学 明治大学商学部4年

身の弱点を強みにするためのヒントとして捉える。という考え方に落ち着いてきた。

近頃、情勢（消費）の変化とスピードの目まぐるしさを寮内外でひしひしと感じている。以前は緩やかなものだと思っていたが、社会と情報の広がりが大きくなってきたことで、瞬時に情報を得られる情報過多で混沌としている状態には少々疲れてしまふときがある。だが、変化に怖気づいてしまふことはあっても、決して排他的な姿勢である必要はないと感じているし、おかしいと思ったことには積極的に声をあげることも大切であると思っている。また、とりあえず触れたことのない未知を噛み砕いてみて、その面白さを探してみるのもありだと思う。正解か不正解かをすぐ決めずに、一旦無正解にしておくのもいいと思う。他人の気持ちはもちろん、自分の気持ちもよくわから

ないことの方が多いのだから、正解・不正解を決められないのは仕方がない事だ。

自他の行動・発言・失敗等の諸々は正解・不正解が不確定なものであり、白黒をはっきりさせるばかりでなく、不確か・不完全なものも受容し、広く感じられるような大人になりたい。

